

『今月の天候と農作業』

通巻第5630号
8月号
令和元年8月1日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	30	40

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は高い確率70%です。2週目は高い確率50%です。

3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 8月3日(土)～8月9日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて晴れますが、後半は湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 8月10日(土)～8月16日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4 週目の予報> 8月17日(土)～8月30日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理と追肥

水管理は、根の健全化のために間断かん水を行い、出穂前後は十分に水を保ちます。台風の際は深水とし、吹き返して高温・乾燥風の恐れがある場合は、風が止むまで深水を保ちます。

追肥の適期は、ヒノヒカリでは幼穂の長さが約1 cmの時期です。施肥量は葉色を見て判断します。収量や品質・食味に大きく影響するため、適期に適切な量を追肥しましょう。基肥で一発型の肥料を使用している場合は、追肥は不要です。

出穂後に高温になると白未熟の発生しやすくなります。十分な用水があれば、冷水掛け流しや水田内で高温になった用水の入れ替えを行います。

2 病虫害防除

いもち病は出穂前と穂揃期頃に防除します。紋枯病は、出穂前に防除します。

今年は、トビイロウンカ（秋ウンカ）の飛来が早く、飛来量も多くなっています。コブノメイガもやや多い発生です。予察情報や発生状況をもとに防除します。特にトビイロウンカは、被害に遭うと大きく減収するため注意が必要です。

カメムシの防除は、1回目は穂揃期で、その7～10日後に2回目の防除を行います。

◆大豆

1 中耕・培土等

雑草対策や発根を促すため、中耕・培土を2回行います。1回目は本葉3葉期に第1節の位置まで、2回目は本葉5葉期に第3節の位置までが基本ですが、梅雨の影響等で播種が遅れたほ場では、草丈や開花（莢）位置が低くなるため、培土の高さは収穫時の刈刃位置も考慮します。また、ほ場の排水溝も整備します。

2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場の観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけた場合は直ちに防除します。

◆そば

播種時期は山間地域で8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

排水溝などの排水対策をしっかりと行い、天候を見ながら播種します。播種量は10 a 当たり条播が6 kg、散播は約10 kgです。

（荒砂 英人）

施設野菜

◆施設野菜全般

施設野菜の育苗開始時期ですが、8月の高温は雌花の着生や発達に大きな影響を与えます。温度管理に注意し、こまめなかん水管理が必要です。

防虫ネットの設置は欠かせませんが、ハウス内の温度が高くなるため、遮光資材等を利用して昼間の温度上昇を抑えます。曇雨天日や朝夕には苗に光が当たるように遮光資材の開度を調整します。

◆きゅうり

高温期の育苗では地上部の生育に対して鉢内の根量が少なくなります。健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行います。

アブラムシ類やアザミウマ類が媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要です。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぎ、定期的な薬剤防除やウイルス病の伝染源となるハウス周辺の除草を徹底します。

◆ピーマン

セル苗など若苗で定植する場合は、初期生育が旺盛になるため、基肥の減肥や活着後のかん水を控えて、草勢を調整します。

鉢上げを行い二次育苗する場合は、生育が進むと蒸散が盛んになるため、日中乾燥しないように適宜かん水を行いますが、夕方のかん水や多かん水は避けます。徒長を防ぐため鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。

◆トマト

ミニトマトでは下旬よりセル苗のダイレクト定植が始まります。初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすいため、基肥を減らし、活着後のかん水を控え、草勢を調整します。黄化葉巻病（TYLCV）対策として、ウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底します。

◆いちご

鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中に十分なかん水を行います。水のかかりにくいところは手かん水を行うなど、こまめな管理が必要です。緩効性肥料等を置肥する場合は、今月中旬までに施用します。極端な肥料切れは苗質に大きく影響するため、苗の生育状況に応じて液肥の葉面散布等を実施します。

（黒木正晶）

葉茎菜類及びいも類

◆かんしょ

地際の茎や芋の腐敗を引き起こす基腐病や乾腐病や、立ち枯れ症状を起こすつる割病が確認されています。各種病害とも排水不良のほ場で拡大する恐れがあるため、排水路の整備・点検を細やかに行いましょう。また、発病したつるや芋は速やかに抜き取って堆肥舎で腐熟させるなど、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。さらに、次作への影響を抑えるため、種芋を採取するほ場で、他のほ場で使用した農機具や長靴を使用する場合は、必ず洗浄してから使用してください。

◆さといも

さといもの疫病を発生させないため、新しい葉の展開に併せ、定期的な予防を続けましょう。梅雨明け後は、さといもの葉面積が日増しに大きくなり、蒸散量も増加するため、早めのかん水を心がけましょう。3月植えの石川早生は下旬から収穫期となります。試し掘りを行い、肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、収穫は計画的に進め、8月中旬には終了しましょう。中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となります。中生種は乾燥による芽つぶれ症状が出やすいため、適宜かん水を行い、品質向上に努めて下さい。

◆しょうが

今月上旬が1回目の追肥適期です。10aあたり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果を高めるために、土寄せも行ってください。また、梅雨明け後は急激な気温上昇と乾燥が予想されるため、早めのかん水を行います。なお、畝間かん水をする場合は、滞水しないように注意しましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

秋から冬にかけて栽培する野菜の収量・品質を高めるためには、夏場のほ場管理が重要です。今月は土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行いましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

極早生品種の今年の着花は多かったものの、生理落果が多く、やや裏年傾向となっています。Mサイズを目標とした果実横径は、8月10日の時点で50～56mmが理想です。果実肥大の状況や結果数に応じて、仕上げ摘果の時期や程度を調整しましょう。

◆ 完熟きんかん

8月下旬からは、傷果と一節二果なり果を中心に荒摘果を開始しましょう。初期肥大を確保するため、結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。

◆マンゴー

7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になります。収穫終了後は速やかに剪定を行い、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤の利用によって、新梢の充実促進を図りましょう。既に剪定が終了した早期出荷園では、十分なかん水と葉面散布を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆クリ

今月から収穫が始まります。収穫は毎日行い、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らしましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆夏秋ギク

強日射による成長点付近の葉焼けが懸念されるため、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を遅滞なく実施してください。

9月出荷作型では、高温や多肥により貫生花や扁平花などの奇形が発生しやすいため、過剰な施肥を控えるとともに、遮光や換気等を積極的に行いましょう。

◆秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めてください。

なお、穂冷蔵時の温度は2～4℃とし、冷蔵期間は開花遅延を防止するために3週間までにしましょう。

また、高温時の穂の安定確保のために、摘心・採穂時にベンジルアミノプリン液剤を適宜茎葉散布しましょう。

◆ホオズキ

出荷終了後は、土壌伝染性ウイルス対策として、残渣の分解及び腐熟処理を徹底して実施してください。また、次作に実生苗由来地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために早めに播種を行いましょう。

◆スイートピー

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。

充実した大きい種子を選び、吸水処理は必ず流水中で行ってください。また、冷蔵庫のセンサー故障による種子冷蔵不足を防止するために、事前に必ず冷蔵庫の庫内温度を確認しましょう。

◆デルフィニウム

中山間地では定植が始まります。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を積極的に行いましょう。

◆キイチゴ

秋に向けて、弱枝や不良枝の切り戻しを行います。その際、一度に実施するとストレスにより株が枯死する可能性があるため、樹勢維持のために充実したシュートを3～4本程度残すとともに、数回に分けて実施しましょう。

また、萌芽促進のために、必要に応じて通路かん水を行いましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

豚では、7月24日現在で、岐阜県、愛知県を含む6府県において、豚コレラの発生が32例発生しています。また、アフリカ豚コレラは、中国の周辺諸国に感染が拡大しており、さらに、中国の旅客の携帯品からは、ウイルス陽性事例が確認され、国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎への風の通りを良くするために、換気扇等を動かすとともに、畜舎内へ直射日光が入らないように、寒冷紗の設置や、輻射熱を抑制するために、屋根散水や屋根への石灰塗布等を実施することは、有効な暑熱対策となります。

また、夏場は全ての家畜で、他の季節より多くの水が必要となります。いつでも新鮮な水が飲めるように、水槽やウォーターカップはこまめに清掃しましょう。

さらに、飼料が腐敗しやすい時期になります。カビが生えたり、色や臭いが悪くなったり、熱をもった飼料は、絶対に給与しないようにしてください。

◆飼料作物

飼料用トウモロコシの収穫作業の時期になります。暑い中での収穫・調製作業になるため、体調管理をしっかり行い、適宜、休憩を取りながら農作業安全に心がけて、作業を実施するようにしてください。

また、ツマジロクサヨトウの発生が本県で初確認されました。疑われる虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センターへ連絡するようにしてください。

(大山 佐喜子)

工芸作物

◆茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と葉層や芽数の確保を図るために大変重要です。

1 最終摘採と干魃被害防止

秋芽の生育期間を確保するため最終摘採時期は、山間地域で7月中旬、その他の地域で8月上旬が目安です。また、遅れ芽や徒長枝は秋芽を切らないように注意して整枝します。高温・乾燥は、秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、七日おきに25～30mmの散水が効果的です。

2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病、輪斑病等の病虫害が発生しやすくなります。秋芽萌芽期と二～三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。網もち病の発生が多い茶園では、四～五葉期頃にもう1回追加防除を行います。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るため、茶園の観察に努めましょう。

なお、チャトゲコナジラミに関する問い合わせは、最寄りの農業改良普及センターへ連絡をお願いします。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では九月上旬までに、これ以外は九月中旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用します。土壌が固く根量が少ない茶園では、九月上旬を目安に堆肥を1～2t施用し深耕します。加えて、降灰の多い茶園は苦土石灰によるpH改善にも取り組みましょう。干魃被害等で樹勢低下が見られる茶園は、液肥の散布が効果的です。

(黒木 清人)

◆しいたけ

夏場の高温は、しいたけ発生量の減少や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぎましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期であるため、ほだ場をこまめに巡回して被害が見受けられた場合は、被害木を取り除いて隔離するとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くし、害菌の発生を防ぎましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。

- 1 病害の耕種的防除のため、総かぎ終了したほ地から残幹処理を行いましょう。その際には、すみやかに残幹根ごと、ほ地外へ持ち出しましょう。また廃マルチについては、市町村が定める期日・場所にて適正に処理しましょう。
- 2 夏期深耕は、土壌中の病原菌密度低下や、土作りのため重要な作業となります。スキ等による反転深耕を行い、10日置きにロータリー等による砕土を行うように努めましょう。特に、今年病害が出たほ地については、念入りに行いましょう。
- 3 貯蔵害虫発生防止のため、セリコは販売終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、貯蔵中の吸湿防止のため、全包ポリ袋梱包を行いましょう。
- 4 販売に向けて、出荷包の確認を行いましょう。特に、異物・異臭・過水分・色損葉等の混入など、出荷規格を遵守しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉)	やや少	箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。 トビイロウンカの6月1～7月3半旬の予察灯への誘殺数は70頭（平成26.6頭）であり、平成より多く確認されています。本虫は増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、今後の防除を徹底します。トビイロウンカの第2世代の防除適期は8月中下旬頃と予想されます。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ ※ (秋ウンカ) セジロウンカ (夏ウンカ) コブノメイガ	やや多 やや少 やや多	
野菜類等 ※※	アブラムシ類 ハスモンヨトウ等 のチョウ目害虫	並 やや多	アブラムシ類は、ウイルス病を媒介し、大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。 ハスモンヨトウのふ化直後の若齢幼虫は葉裏を集団で加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。
さといも	疫病 ※	—	6月6半旬以降、県内各地で初発生が確認されています。登録薬剤による継続した防除を徹底します。
サツマイモ	つる割病、基腐病、乾腐病、茎根腐細菌病 ※	—	各種病害とも排水不良のほ場で多発しますので、各ほ場外への排水を促すため、排水用の溝を必ず設置しましょう。発病株（つるや塊根）は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにしましょう。
カンキツ類	かいよう病	やや多	台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。 黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、薬剤散布後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。 ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度では防除効果が低下しますので、発生初期段階（寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5～1頭）での防除がポイントです。
	黒点病	やや少	
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	少 やや少 やや少	炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。 ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7～10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。 カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノキアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果が劣るので、残効性の長い薬剤が1週間間隔での連続散布を行います。
	チャノコクモソハマキ、チャハマキ、チャノソガ カンザワハダニ チャノキアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカガラムシ	並 並 少 多 並	
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※※は注意報、※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazakiです。</p>			